



2014年2月19日 日本山岳文化学会 有志の集い

後列左から＝西本武志（前副会長）、佐々木誉実（現副会長）、相原守（会員）、

中村純二ご夫妻（理事：東京大学名誉教授、第1次～第3次南極観測隊員）、砂田定夫（理事）

前列左から＝田中有、田中文夫（前評議員）

大雪がもたらせた残雪の中、日本山岳文化学会有志が平日の「おおすみ山居」に集結しました。大雪の寒さで木々の芽吹き、開花は遅れ気味です。二週前とあまり変わらず、白梅の開花が遅れています。紅梅は五分咲き程度でしょうか。ロウバイの枝は、まだ黄色い蕾です。山居の休憩入口には、4日前の大雪と風で折れてしまった「河津桜」の枝々が、大きな瓶に水差しされています。そのうちの数本を帰り際、おみやげにいただきました。

縁側で一列に向かい、温抹茶と梅をあしらった和菓子や自家製甘酒を舌で味わいながら、ガラス戸越しに雪景色の日本庭園を目でも味わいます。真冬の平日、昼前の優雅で贅沢な時間です。

90歳の中村先生を筆頭に、85歳の奥様、70歳帯の日本山岳文化学会役員各氏（西本さん、佐々木さん、砂田さん、相原さん）、67歳の私、そして26歳の次男という、山岳ならではの集いです。老若の違いがあっても、山と文化を語り合い、心通じるこの集いは、孤高の楽しみでない共に有ることの喜びを教えてください。過度な文明進化の時間に追われることなく、人と自然が「ともに有ること」の文化を、共に楽しめるひと時です。

かつては第3次南極越冬隊でタロー、ジローとともに極地探査をされた中村先生。1970年代からヒマラヤ遠征を繰り返した面々も、それぞれ持病を抱えながら今も山に向かいます。根っから山が好きなのです。青春から老いに至る今でも、ロマンを求める心は不滅です。 （記：田中文夫）



お茶を飲みながら雪の庭園を楽しむ



温抹茶と梅の和菓子